

「意味布石」考

—沖山光の読解理論の特質をめぐって—

塚 田 泰 彦*

(平成4年10月30日受理)

要 旨

国語科における読みの指導理論として支配的な解釈学的読解理論の近年の一典型として沖山光の構造的読解理論を取り上げた。彼の理論を現在の読解研究のパラダイムから分析し、次の3つの軸上での偏向を指摘した。1. ラング・パロールの軸でのパロールへの傾斜、2. シンタグマティック・パラディグマティックな関係の軸でのパラディグマティックな発想の欠如、3. 作者・読者の軸での読者論的発想の欠如。これらの偏向を明確にすることで、本稿では読解理論における構造主義から構成主義への力点の移動の必要性を応用言語学の立場から論じた。

KEY WORDS

reading comprehension 読解

structuralism 構造主義

parole

パロール

paradigmatic パラディグマティック

1. はじめに

国語科における読みの学習指導は、現在なお支配的な解釈学的読解理論の枠組から開放される新しい方法原理を模索している。その場合、パラダイム変換の原動力になるものは作品中心主義批判すなわち文章理解における読者の役割の重視である。これまで解釈学的読解理論が最優先してきた「作者の意図による作品内実の表現における統一性」は、読者反応批評理論等の展開によってその緊密な統一性を疑われつつある。一方、認知心理学における文章理解研究も、「理解」の実態を読者の既有的知識・能力とのかかわりで構成的に捉えようとしている。こうした新しい研究成果は目下着々とわが国の研究にも導入されているが、原理面でのこの変換の意味を国語科の読みの研究史の中で具体的に検討する作業はまだ実りある成果を生んでいるとは言えない。そこで、本稿では新たな力点の移動が見られる諸原理を視野に入れて、この変換の意味を明らかにする一助として沖山理論の批判を試みた。現在の趨勢が、沖山光の構築した構造的読解理論と対極的な原理への移行を意味していると考えたからである。

沖山自身自著「形象理論と構造学習論」で明らかにしているように、彼の理論は垣内松三の解釈学的読解理論（形象理論）の基本思想および方法的な枠組の中でこれを継承発展させたものである。読解理論としてはこれにいくつかの制限を設けることでより洗練されたものになっている。しかし、またそれだけに現時点のパラダイムからみると偏向した特質もより鮮明になる。本稿は、この解釈学的な原理によって典型化された沖山理論の特質を明らかにすることで、

* 言語系教育講座

現在の読解理論研究の新しい焦点がどこに移り、またそれがどのような意味を持つことになるのかを捉えようとした。

本稿での焦点は、沖山の主張の根拠となる構造主義の考え方がいかに読解における構成主義的な発想を切り捨てていったか、すなわち文章の意味構造の全体性を最優先させるためにいかに語のレベル（部分の読み）を必要以上の不当な位置へと追いやったかを明らかにすることである。今日の読解研究の焦点の一つである読者の既有知識の役割の重視（構成主義的な発想による部分の読みの重視）が、どのように不問に伏されることになったかを追究することは、現在の読解理論研究の位置づけにとって急務であると考えたからである。

以下ではこの論点を鮮明にするために、沖山の読解理論の中心概念として打ち出された「意味布石」の考え方を取り上げて、その特質を明らかにした。

（なお、沖山の読解理論は昭和30年代を中心に形成されたもので、その後この理論は40年代に入ると読解の一理論としての役割を越えた構造学習論（思考指導の理論）へと深化発展し独創的な教育理論となる¹⁾。しかし本稿では、研究の趣旨に添って、読解理論としての部分だけを取り上げることにした。そのため、昭和20年代末から50年代へと一貫して追究された沖山構造学習論の真価を問うものではないことを断っておかなければならない。筆者はこれまで、読解研究を解釈学的な立場から応用言語学的な立場へいかにして移行すべきかを追究してきており、そこで考察すべき原理である言語理論の一部を沖山と共有していることが、あえて昭和30年代に限定して検討する理由である。）

2. 構造主義の発想

まず沖山理論の概要を示す。

沖山は「私の構造的読解の思索は昭和27年3月の読解に関する調査」²⁾に始まり、「取り組んだのはS.28-S.30までを中心として」³⁾いると述べている。最初の単著「国語学習における診断・治療の技術」（昭28）には、すでにその後の構造的読解理論の考え方を支える基本的な用語（「言語（ラング）」と「言（パロール）」の区別、「布石」の喩え、「文脈」の重視など）が意識的に使われている。ただ、この時点では、まだ「語」のレベルでの意味操作に読みの実際的な焦点があることに注目しておきたい。というのも沖山理論は「語」よりも「文章」、「部分」よりも「全体」、「知識」よりも「行為」へと、すなわちソーシャル流のラングよりもパロールにおいて読解行為を捉える立場を厳として維持しようとしており、その点で部分の読みを否定した一つの典型的な読解理論となっているからである。

言うまでもなくこの全体性重視の考え方は解釈学的読解理論の核となる文章観に由来するもので、沖山にあっても、文章は作者の意図によって目的的に構造化された固有で一時的、絶対的な存在として定位されている。このことを念頭において、彼の読解理論のキーワード（「意味布石」「意味軸」「意味構造」「構造的読解操作」）を確認することから始めたい。

沖山は後年（昭和52）、読みの本質について次のようにまとめている。

『「作家が、かれ自身がそこに読んでいること」とは、サルトルのことばで言えば、『標的をねらってピストルを発射する』ことに当たる。標的とは、作家が表現しようとねらったことである。われわれは、これに『軸』なる用語を使っている。発射されるどの弾丸も標的をねらっ

て弾道を描いていく。このことを、われわれは、『軸に向って統合される』とか『首尾一貫性』という用語を使っている。軸と軸への統合とがなければ、表現とはならない。どの文も標的に向って動いている。したがって、意味を生み出す相互関係というの、標的を指向しての相互依存でなければ、表現へと統合されたまとまりは生じない。このまとまりを、われわれは、『意味構造』とよぶのである。『かれ自身がそこに読んだ』とは、書き手自身によって生産された意味構造を指している。この観点から、作品は書き手の『所産』と言われるわけである。この所産の働きを指して『文章化』とよぶ学者もある。われわれは『構造化』の用語を使っている。

書き手は、自分の所産としての作品を、自分が意図した方向に読み手が受け取ってくれることを、むなしく（『読み手が額面どおりに読み取ってくれるまでは』の意味）待ちのぞんでいる。この書き手の期待に応じるためには、読み手は、作品の意味軸を発見し（われわれは『洞察』と使う）意味布石を発見し、布石間の関係を、軸の方向に統合していく努力をしなければ、作品を通して、読み手と書き手が会えることはない。このような、作品を通しての読み手と書き手の互いの働きかけを、私は『書き手と共に思考する』ということばで表現した。⁴⁾

（筆者注：このサルトルの引用にはじまる内容・用語は既に「意味構造に立つ読解指導」（昭33、23頁）とほぼ同じである。このことから本稿の対象とする読解理論は昭和30年前後には全体的にほぼまとまっていたとみられる。主要な用語については以下に解説を付け加えておく。

「布石」：ソシユールのチェスの比喻を念頭に置いたものであるが、「布石」自体は語句などの言語的実体を指している。

「意味構造」：一般に使われる「文章構造」とははっきりと区別された、文章の内的構造を指す。この構造は非常に抽象的な存在で「意味の浸透関係」「ことばの函数関係」であって単なる言語的実体における「文法的な加算関係」ではない⁵⁾。その点でこの構造を捉えることは「高度の意味発見」⁶⁾であるという。

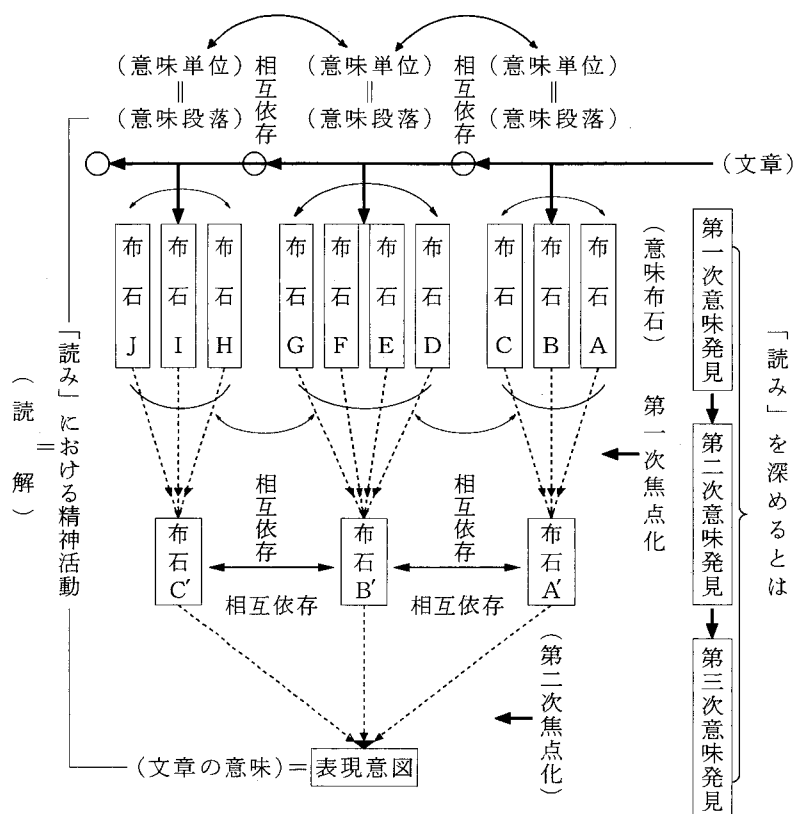
「意味布石」：「意味構造」をもった「布石」ということで、語句などの具体的な言語面（言語的実体）を指すこともあるが、その内的構造を前提にした用語である。

「軸（意味軸）」：「洞察」によって捉えられる文章統一の核となる原理や思想を指す。垣内理論で言えば「直観」によって捉えられる「形象」として、パラレルに位置づけることが可能なものである。ただし沖山の特徴は、文章表現における目的性をより重視する点にあり、目的に貫かれるという意味で「軸」という用語を採用している。）

この引用で明らかなように、沖山の言う「読解」とは、作者によって目的的に構造化された表現を意味軸に添って作者と共に思考し再構造化すること、と定義できよう。またこの読みの実際すなわち解釈についても次のように説明している。

「解釈をどの方向に進めるかは、出発点をどこにおくかによって異なってくる。また表現をどのように理解するかによっても異なってくる。前者は読解への視点（足場）を意味し、後者は読解操作を意味する。視点は、『どの方向に』を定める出発点であり、読解操作は『どのように読みすすめるか』の手順である。わたしは、このことを、『見とおし』と『からみあい』とよんでおいた。『見とおし』は方向の洞察であり、『からみあい』は、語、文、節、段落などの相互依存のおさえかたである。」⁷⁾このため「視点」が違えば、捉えられる「意味布石」は違ってくることになる。

沖山の読解についての考え方は以上のように概括できるが、これを受けて彼は、理解の本体でありかつ直接指導の対象となる「構造的読解操作」の実践的なモデルを下図⁹⁾のように示している。

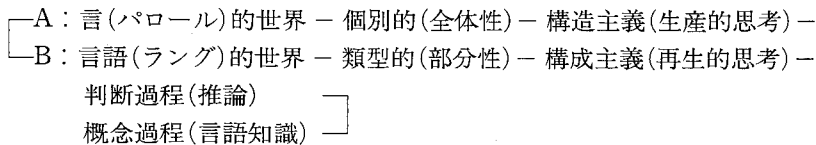


これは、読解過程のモデルであると同時に、読解操作の手順を示したものである。作者の表現意図（意味軸）に向かって、依存的なことば（意味布石）を漸層的に予見し深化していく操作のモデルである。この操作を繰り返すことによって構造的な関係把握の予見能力（意味布石発見能力）を育成することが読解指導の眼目であるとされる。語彙や文法の学習あるいは段落指導といった知識の学習は目的ではないとされている。（なおこの一連の操作の結果として意味構造図が書かれることになる。）

「構造的読解（意味構造論）は、言語の中におけることばの函数関係を発見するという立場を取るのである。場（言野）の体制化（書き手からすれば構造化、読み手からすれば再構造化）の操作は、読解における生産的思考の働く場である。この操作は、その場（言野）に備わる内的必然性（言野におけることばの磁力）によってのみ行われる。したがって、この言野（場）におけることばの函数関係を発見しないかぎり、構造的読解という、読解における生産的思考は達成されないのである。」⁹⁾

沖山理論はこうした読解における内的操作（生産的な思考操作）を指導の眼目とした理論構成になっている。

筆者はしかしこの「構造的読解操作」の捉え方とその位置づけに疑問を感じている。沖山は構造主義の立場から作者の意図を洞察することに読解の主眼を置いているため、文章の言語的事実（部分的な語句の意味）へのこだわりを排除して、文章のより深層にある抽象的な構造へと飛躍する。そのため、結果として、「構造」を重視する思考指導の一般論へと移行してしまっているとみられるからである。これは布石（言語的実体）と意味構造把握（読解操作）との関係の希薄化（乖離）の問題として批判的に検討されなければならないであろう。この点を以下で詳しく論じるために、沖山の構造的読解理論を支える原理を予め整理して示すと、次のA系列の重視（B系列への批判）と特徴づけることができよう。本稿では沖山のB系列への厳しい批判が形式的で極端であり、そのために彼の理論がA系列に即して典型化され過ぎている点を問題にする。



3. 言語的実体としての部分の位置づけ

沖山理論の中心概念である「意味布石」は文章全体を視野に入れた抽象的な内部構造を指すため、布石自体の説明については、教材文の具体的な語や句や節を扱いながらも、それと「構造」とのかかわりは説明されることなくソシュールのチェスの比喻で切り抜けられているところがある。

先にも触れたように、昭和28年の時点では、この「布石」は明らかに「語句」がイメージされており、その深層（意味軸）を捉える階梯も至って不鮮明なままである。しかもこの不鮮明さは原理的にはその後も追究されているようには見えない。読解操作の方法についても具体的な教材文に即して一回ごとに実施される作業（意味構造図）が示されるだけである。そのため、手の内にある材料は言語的実体としては「語（句）（節）」であるにもかかわらず、論じているのは「関係性」だけという結果を生む。

もとより沖山の前提とするところは、語句の意味（ラング的なもの）ではなく全体的な意味（パロール的なもの）であるために（筆者注；沖山は前者を「抽象的意味」後者を「構造的意味」とも呼ぶ）、言語的実体のレベルで言えば、接続詞などをふまえた一般的な文章構造（段落構成）などの実体把握にとどまることをよしとしていない。こうした一般化できる様式・型（ラング的なもの）を否定して、より深い意味より深い解釈（意味軸）につくためにむしろこのラング的なものは越えるべきであると主張している。文章に内在する構造的意味の世界で全ての操作は構想されている。

しかし、これではパロール概念が一方的にこの世界を正当化するだけであり、ラング的世界（言語知識）との関係を問う道は閉ざされてしまう。

これは、言語的実体を出発点（対象）にして進んできた読解研究の主流から見れば、語や句、文といった言語的実体の基本単位を不鮮明にしていく方途であるとみられる。沖山理論はソ

シュールの概念をふまえたという意味では応用言語学的な発想に立っているが、しかし読みの事実を言語的単位を前提にして分析研究することはパロールの立場をないがしろにしたすなわち文章の本質を弁えない構成主義的、ラング的、類型的なアプローチとして否定されている。そのため、ラング的なものを前提にして構築されてきた言語理論の諸原理の多くも結局視野の外に置かれてしまう。応用言語学的なアプローチとしてはこの域を一步も出ないものになるのである。

以下の批判(1)でも言及するが、沖山理論の特質はこの言語知識（ラング的世界）と操作能力（パロール的世界）との峻別にある。後年、前者を基礎学習、後者を基本学習として区別し、国語科の教科構造論として学習体系の構造化をはかっているが¹⁰⁾、筆者の課題意識から注目したい点はこの両者の関係について沖山がどれだけ実質的な議論を展開できているかである。しかし結論的に言えば、この沖山の二分法的把握は二分法の必要性を論じていながら、その実、後者（操作能力）に集中するためだけに前者（言語知識）を排除しているとみられる。沖山はこの両者を全く別のものとして育成する構えを取るが、ソシュールのモデル（ラング・パロール）が観念的な二分法にすぎないことを考えても、読解操作の実際の段になると両者の混在した内容にならざるを得ない。沖山が強く言語知識を排斥する論に立つことはそのため読解操作自体の論としては逆にあまり生産的な議論にはならないと言わざるを得ない。以下では沖山のこの峻別とその具体的な読解操作での偏向とを検討する。

4. 「意味布石」批判(1)―読解操作をめぐる―

沖山の思索は垣内松三の文意の直観の論（形象理論）を出発点にしているが、この意味ある直観に至りつけない者、そうした能力不足の段階にある者がどうすればこの文意（意味軸）に至りつけるのかが彼の研究課題であったと考えられる。昭和28年までには、自ら企画し実施した文部省の読解力調査の結果を分析して、最も欠如している能力として「構造化（関係把握）能力」を特定したことが沖山理論の決定的な出発点となった。文章の読みは作者の意図に即することであるとはいえ、ここに至る途中で構造的に文章を捉えないためにつまづいている多くの事実を目の当たりにしたのである。しかし、筆者の判断では、沖山の論はこのつまづきとはどのような実態かを複合的な原理によって考慮することをしないで、「できない」という結果を欠如している能力（構造化能力）に置き換えて、そのトレーニング方法を提案した感がある。意味は発見されるものというが、発見される意味の起点（言語的実体）との関係を厳密に問うことなく、発見能力としての関係把握力だけを問題にしていたとみられる。この課題へのアプローチとしては、筆者は、読者の既有知識を視野に入れた言語的実体（部分）の構成論へと立ち返るべきであると考えているが、これを抽象的・観念的な関係概念の導入による思考操作の論として展開しているところに沖山理論の困難さと研究対象の狭さが生じている。その点で、読みは文意の直観を基軸とした言語単位ごとの意味の「再構成的体験」であることを明らかにしている垣内のことばは改めて振り返る価値があると思われる。

この再構成的体験の構成原理について、垣内には「連想の力」とその作用の方向についての次のような発言がある。

「文字に現われた文の形に囚われないで想の形を捉える作風は、（中略）盲人の読方の研究

に就いて見ることができる。盲人が点字を読む時に、右手の指で、文の全形を検べ、左手の指で文字を辿りながらその一部分を探ると、残りの部分を直下に感じて了う。かくのごとく、一語の著しい部分を感じたら全文を知るという事実から、知覚と連想との関係の電光の如き力を見た。(中略)知覚を喚び起す一の著しい刺激から、全形を連想し、又はそこに書かれて無い文字言語をも連想することのできるのは、心眼を以て文を視るからであるということが出来る。この立場から、文を読むのは、文字の連続の上に於てではない。文中の一の手がかりから文を内視する意識の上に想の形が見えるのであると考えることができる。」¹¹⁾

こうした連想の力と意味の生成との関係を沖山は研究対象として直視しながらも、言語的実体に即して逐次構成的に扱うことは構造主義の立場から全面的に否定する。そのため、具体的な操作では「意味構造」自体の抽象性と相容れない形で表面的な語句の操作が維持されるという混乱を生む結果になっている。垣内のこの説明をゲシュタルト主義一辺倒の論と沖山はみなそうとするが、筆者としては部分から全体への経路における語句の活力(構成主義的立場)に含みをもたせたものと評価したい。全ての部分を逐次的に構成していくという主張ではもちろんないが、部分を起点にした全体への展望の原理を無視してはいないと判断している。垣内が「想の形」といったことと沖山の「意味構造」が異なるものではないことを考えると、沖山が焦点化した読解の中身が、読解操作(構造的把握能力)自体に偏ったことは、言語的実体が極端に保留される結果となった点で問題とせざるを得ない。

本稿では、ひとまずこの「操作」の内容と能力との関連を明確に捉えないまま「操作」の方法へと重心を移してしまった点を指摘するにとどめたい。その理由の一つは、一般化することの困難な読解操作の逐一を具体的な教材文に即してここで改めて一、二例再検討してみても生産的ではないと判断したからである。(このポイントは角度を変えて次の批判(2)で検討する。)もう一点は、沖山は意図的にこうした限定を行って議論していることを考慮するからである。すなわちこの「操作」自体の追究において沖山が垣内の「想」の力学に注目しその創造的な原理についてさらにいくらかでも語り得たことは一方で高く評価されなければならないと考えるからである。

(筆者注;この点について沖山は自らの立場をピアジェのことは引用して次のように説明している。

「原子論の連合の図式と発出の全体の図式を越えて、第三の立場が存在する。それは、操作的構造主義の立場である。すなわち最初から、関係的態度をとり入れる立場だ。」「われわれが『意味構造』と言っているのは、この第三の立場とピアジェが述べている『操作的構造主義』にあたる。」¹²⁾

この立場を一層明確な論に仕立上げようとして、彼は操作自体に益々焦点を当てていくことになる。昭和37年の著作(文献7, 34頁)では、読解操作と精神操作と思考操作とを同一視する見解に踏み込んでいる。こうして沖山読解理論はこの頃を転機にして複雑な思考操作の生産的特質を追究する「構造学習論」へと展開していく¹³⁾。

5. 「意味布石」批判(2)一言(パロール)的世界と語彙論的発想一

沖山の構成主義批判への反論のポイントとして、批判(1)では言語知識と読解操作との分離に

ついて指摘したが、さらに角度を変えてこの両者の関係に生産的な光を当てるポイントを指摘したい。

「文字が集まって語となり、語が集まって句となり、句が集まって文となる。文章は文の集合体であるとする考え方は、構成主義である。この立場の最も素朴な現われとして、語義さえわかれば、文章の意味が読みとれるとする」¹⁴⁾ という沖山の発言に見られるように、彼の念頭には文章の線条性を前提にしたシンタグマティックな構成主義しかないと思われる点である¹⁵⁾。文中のことば(語)は文脈に即した唯一の「布石」として選ばれているという理由で、文中の一語の意味をラング的発想に立って安易に同義語で置き換えることを許さない。しかし、この点についても本来、表現における語の取捨選択というパラディグマティックな関係(選択の軸)には二様のものを認めることが重要であろう。すなわち選択の軸における代替可能性には、意味上の同義性によるものとそうでないものがあるということである。沖山は前者についてのみこの軸を捉えて、ソシュールが豊かな発想の下に開拓したこの関係の広がりにはほとんど注目していないとみられる。沖山は文脈を重視するがその「文脈」概念にはこのパラディグマティックな発想が欠如しているため、語の意味の世界と文章の構造的意味の世界とを結びつける原理にはなり得ていない。パロール概念の拡大解釈の下にある沖山にとって、文脈と文章の構造的意味とは同じものなのである。そのため、単なる語の「言換えは、ことばを殺すものである」¹⁶⁾ という主張になる。パラディグマティックな軸上での言い換えはラングの発想による無意味な同義的言い換えとしてしか捉えられていない。しかし、語の意味的な広がり同義性による結合だけでなく連想による拡大ないし知識構造としての関連性による結合など多様なものである。文章の理解がこうしたパラディグマティックな軸上での豊かな操作に支えられていることは否定できない。その意味で、本来、語彙論的に文脈を捉えるということはこの一語の意味的な拡大の様相(ネットワーク)を捉えることでなければならない。その場合また同時に、文章に言語的実体として定着している語彙的な構造すなわち意味的関連性の下に布置されている語群をも構造的に把握するという二重の視点を持つことが必要である。先に引用したように垣内は一つの語からの連想の力を重視していたが、この連想の力は具体的で多様な意味と規則のネットワークに支えられていることが改めて想起されるべきである。

沖山のように、ここでもパロールに焦点化する立場に立つことが、文のシンタグマティックな軸とパラディグマティックな軸の区別を曖昧なままにして文の意味の生成にかかわるこの連想の作用(豊かな連合関係)を無視させる結果を生んだとみられる。ただし、この沖山のような捉え方はこれまでの読解研究でも一般的なものと言わざるを得ない。その意味で、この選択の軸(パラディグマティックな発想)について意識的にかかわった読解理論は現在までのところ開拓されていないと言えよう。筆者はこのポイントがこれまでの解釈学的読解理論の批判の起点となると考えている。本稿ではこれ以上詳述することは控えるが、筆者の言う文章理解における「語彙論的発想」を簡明に述べれば、文理解におけるパラディグマティックな関係の重視と、文章の語彙的構造を「意味場」の発想に立って重視していくということである。もっともこの発想が沖山を始めこれまでの読解理論に欠如しているのも由なしとしない。実際、言語研究の領域としての語彙論は1960年代に入って漸くテキスト分析の視点として本格的な研究成果を生むようになったからである¹⁷⁾。

一方またこの点については現在認知心理学からのアプローチも盛んになっている。文章理解と読者の既有知識との関係の深さが注目され、「知識構造」の在り方が研究の視野に入ってきた

からである。この方面の成果を念頭においてみると、ゲシュタルト心理学説に肩入れしている沖山の視界には「概念的思考の網の目」論¹⁸⁾ があって、今日認知心理学に言う「スキーマの賦活」の考えにも言及が見られることは注目できる。しかしこの点も萌芽的な文献の引用にとどまり、この「概念の網の目」も文脈概念へと還元されてしまっている。こうした判断も意味構造自体はパロール的で類型化を許さないものであるという前提からの当然の帰結である。しかしこの「概念の網の目」すなわち「意味のネットワーク」という視点はさらに記号論の原理から眺めるとき一層注目できる理論へと変貌するものと考えられるが、この点でも、沖山理論にあっては意味構造自体が非常に抽象的なもので言語的実体を離れたものとみられているため、意味理解の中心原理であるコードの発想が生れない。沖山の「意味構造」概念には意味のネットワークの意識があるが、この意味の脈絡はコード（記号論的発想）としての理解ではないと推測される。ここでも意味構造と言語的実体とを結びつける道は閉じているのである。

現在の主要な読解研究の流れは、実体のないあるいは個々の文章の折々の解釈に生起する意味構造の流動的な特質と、言語的実体である文章の語彙的構造などが媒介するスキーマの存在との二つを有効に関連づける道を模索している。このスキーマの考え方は沖山理論と相容れないものではないことを考えると、分離している沖山の意味構造と言語的実体とを繋ぐものとしてスキーマ理論を位置づけることも可能であろう。その場合には、先に言及した語彙論的発想がスキーマの活力を生かした文章の構造把握の方法として確認されることになるであろう。

6. ま と め

本稿では、沖山の読解理論における応用言語学的発想の萌芽性とその偏向についてまとめ、特に語彙論的発想の欠如をめぐって批判的に検討した。筆者の批判の鋒先は沖山が自覚して意図的に切り捨てたものに向っているところがあるが、筆者の意図は、1) この欠如を指摘することによって現在なお国語科の読解理論が切り捨てている知識的・構成主義的アプローチの適切な開拓の必要性を論じること、2) その上で、この種の研究の方途を具体的に示すことであった。

1) を要約すると、次の軸の確保・修正ということになる。

1. ラング・パロールの軸の修正（ラング的発想の回復）
2. シンタグマティック・パラディグマティックな関係の軸の確保（語彙論的発想の必要性）
3. 作者・読者の軸の確保（読者論的発想の具体化）

2) については、スキーマ理論や記号論の成果を念頭において、語彙論的な発想による今後の研究の方向を指摘した。

注

- 1) 文献18, 20-21頁, 参照。
- 2) 文献6, 31頁。
- 3) 文献4, 27頁。
- 4) 文献13, 62頁。

- 5) 文献 6, 128-129頁。
- 6) 同上, 50-51頁。
- 7) 文献 4, 58頁。
- 8) 同上, 31頁。
- 9) 文献 7, 51頁。
- 10) 文献14, 103頁。
- 11) 文献16, 130頁。
- 12) 文献13, 52頁。
- 13) 沖山は文章の「なに」をではなく「いかに」の理解に焦点を当てたという。この二分法は読解理論の枠組としては基本的なものであり、筆者は拙稿（「文章理解と語彙知識」上越教育大学研究紀要, 第11巻第2号, 平成4年）において、前者を「語彙知識」後者を「推論」として二大別している。この区別に照らせば、次のような位置づけが可能である。

「なに」 — 語彙知識（言語知識力）

「いかに」 — 推論（思考操作力）

沖山の言う「見とおしの能力」（読解操作能力）はこの推論の問題として把握することが適当であるので、例えば構成主義的な発想に否定的な K. S.グッドマンの理論（「読みとは心理言語学的推論ゲームである。」）と対応させてみることも今日的課題として興味深い。本来沖山理論はこの後者の成果として位置づけられるべきであるが、本稿では、提案されている読解操作の実際においてこの二つの領域の対応に不用意な混同が見られることを批判的に取り上げた。
- 14) 文献 5, 93頁。
- 15) 文献 7, 67-68頁および文献 4, 68頁, 参照。
- 16) 文献 5, 28頁。
- 17) 次の拙稿はこの成果の一部を検討したものである。「教材分析のための破格論（II）—60年代新ファース派の検討（上）—」人文科教育研究, IX, 昭和57年。
- 18) 文献 5, 196頁。

引用・参考文献

1. M.ウェルトハイマア（昭27）「生産的思考」矢田部達郎訳, 岩波書店。
2. 沖山光（昭28）「国語学習における診断と治療の技術」新光閣書店。
3. ———（昭28）「読解のつまずきとその指導」新光閣書店。
4. ———（昭33）「意味構造に立つ読解指導」明治図書出版。
5. ———（昭34）「読解指導の原理と方法」新光閣書店。
6. ———（昭35）「目的論に立つ読解指導」明治図書出版。
7. ———（昭37）「読解における生産的思考」明治図書出版。
8. ———（昭38）「読解能力開発への道」新光閣書店。
9. ———（昭41）「読解のひとり歩き」明治図書出版。
10. ———（昭46）「表現学習における構造思考」新光閣書店。
11. ———（昭47）「形象理論と構造学習論」明治図書出版。
12. ———（昭47）「人間教育の原点」不二書房。

13. ——— (昭52)「人間変革の学習論」不二書房。
14. 沖山光他著 (昭48)「教科における思考と構造とその発展」東洋館出版社。
15. 沖山光編若尾忠・金井里子著 (昭53)「読むことの系統的指導」新光閣書店。
16. 垣内松三(大11)「国語の力」(「垣内松三著作集」第一巻, 光村図書出版, 昭和52年所収)。
17. 小林英夫 (昭51)「小林英夫著作集」第1巻, みすず書房。
18. 佐々木定夫他著 (昭54)「近代国語教育のあゆみ3」新光閣書店。
19. F. ソシュール (昭15, 昭47改版)「一般言語学講義」小林英夫訳, 岩波書店。
20. 服部四郎 (昭35)「言語学の方法」岩波書店。

On the Feature of Hikaru Okiyama's Theory of Reading Comprehension

Yasuhiko TSUKADA*

ABSTRACT

In this article, the theory of reading comprehension proposed by Hikaru Okiyama is discussed since his theory was regarded as one of the most typical hermeneutic reading comprehension theories that have played a dominant role in reading instruction in Japanese language. His theory is analyzed using the paradigm that is most frequently used in current research on reading comprehension. Three significant features are discussed. They are : 1) emphasis on 'parole' rather than on 'langue' in a parole/langue dimension ; 2) lack of a paradigmatic way of thinking in a syntagmatic/paradigmatic dimension and 3) a neglect of the reader's perspective in the author/reader dimension. Through an analysis of these features, it can be seen that constructionism should be emphasized more than structuralism in dealing with the theory of reading comprehension.

* Division of Languages : Department of Japanese Language